
こたつ

MCおもむろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こたつ

【Nコード】

N7176I

【作者名】

MCおもむろ

【あらすじ】

黒髪シヨートの妹千香と、黒髪ミディアムの妹美香。そして俺。三人の、こたつでの日常。こたつっていいなあ。

「こたつはいいなあ」

こたつに飛び込みこたつ台にあごを乗せて開口一番。

「ちよつとー、足が乗っかってるんですけど」

黒髪ミディアムの妹、^{みか}美香が、台に広げたゲーム雑誌から目を離して迷惑そうにこちらを睨んだ。

「そんな事言うなら買ってきた新作ゲームあげない」

「もつとのせてお兄ちゃん」

「あひゃ、どこに乗せてほしいんだい？」

「刺すよ？」

どこから取り出したのかその包丁は。それを片手に構え、につっこり。ははっかわいいな！。

しょうがないので横に投げた鞆からソフトを取り出して渡す。

「わあいつ、ありがとうお兄ちゃんってこれ最近私が売ったゲームだろがああああ！」

ああ、道理で見覚えあると思った。

そこで、今までテレビに夢中だった黒髪ショート^{ちか}の妹、千香腹を抱えてこちらを向いた。

「あはははっ、相変わらずバカだなあ兄貴」

「そんな事言うなら買ってきた駅前のメロンパンあげない」

「兄貴ってやつぱり天才だと思う」

乗せられやすい奴等だなあ。ニコニコ顔の千香に、鞆から取り出した袋を渡す。

「うおおっ、サンキュー兄貴ってこれカレーパンじゃねーかやつぱりね！」

「お前そんな事言ったらドラえもんが可哀想だろうが！」

「どこにドラえもん要素出てきた！？ 引き合いに出されたドラえ

もん困っちゃうよ!」

「確かに!」

引きつった笑みのショートカット千香。極上の微笑みのメディアムカット美香。二人は立ち上がり、ゆっくりと近づいてくる。

「兄貴ー? ちょっとお話しようぜー?」

「お兄ちゃん、わかつてるよね?」

母さん、今日もこたつはあったかいです。

「——なあなあ千香、ミカン剥いてくれい」

テレビを見ながら両手を暖める事に大忙しな俺。一緒にテレビを見ていた千香は、ひじを立て手のひらに乗せた顔を、ずっと向けてずっと戻した。早っ!

「やだ」

千香はつさり。俺がっかり。今度は美香にお願いしてみよう。

「美香お願い、そろそろ俺にミカンを剥きなさい」

「おかしいなー。ミカンじゃなくて包丁手に取っちゃったおかしいなー」

「ごめんなさいお願いします」

しょうがないなあ、といいながらゲーム雑誌の上でミカンを剥き始める美香。なんだかんだで世話焼きな奴だ。律儀にスジまで取ってくれてる。その剥いた皮の上に実を乗せて俺の目の前に置いた。

「はいどうぞ」

身動き一つせず、口をあんぐりとあけて待つ俺。美香と数秒見つめあう。

「てい!」

瞬間、口に叩き込まれるミカンと美香の張り手。ははっおいしいなー。

「あ、ミカンもうねーじゃん」

千香が台の上にある俺お手製ミカンバスケットに手を伸ばしながら、嫌そうに言った。自然、ミカンバスケットに視線が集まる。残

り一つ。そろそろさむーいキッチンに行つてさむーい床下収納から
つめたーいミカンを出さなければいけない頃合だ。

互い互いに視線を向ける俺達。

リビングに訪れる、一瞬の静寂。

「じゃんけんぽいっ」

千香パー。美香パー。俺グー。

「あいこで」

「オイコラ」

「お兄ちゃんよろしくねー」

再び、テレビ観賞に勤しむ千香と、ゲーム雑誌に視線を落とす美
香。ピースする俺。

「お小遣いほしい人ー」

千香パー。美香パー。ピースする俺。リビングに訪れる、一瞬の
静寂。

母さん、今日もこたつはあつたかいです。

「——ちゅりやあえおうっ!!」

「あーっ！ 兄貴ずりいショートカットしたー！ あとその掛け声
やめろ」

ゲーム機のコントローラーを握り締め、白熱する俺と千香。もち
ろんこたつに入りながら、だ。

「ちいー、お風呂上がったよー」

風呂場から廊下をすたすた歩いてくる、ピンクのパジャマ姿の美
香。肩にかけたバスタオルで頭を拭きながら、こたつの一辺を占領
する。美香の定位置だ。ちなみにテレビにむかいあつた真正面が俺。
右が美香。左が千香。

「みいー！ 兄貴がズルしやがるんだよー！」

台の上にうなだれて、必死に講義する千香。そんな千香を慰める
ように、眉をハの字に微笑んで、頭をなでる美香。

「まあまあ、とりあえずおふる入ってきちゃいなよ」

そう千香は促され、ぶつくさ言いながら風呂場へと向かっていった。そして微笑みを堪えたまま、俺に向き直る美香。手に持つコントローラーはまるで死神の鎌の様。

「じゃあお兄ちゃん、やるっか？」

うなずくことしか、できませんでした。

「うおーい兄貴ー、上がったぞー……ん？」

横に立つ、水色のパジャマ姿の千香。うなだれる俺。

「ちゅりやあえおうえつつうえ……」

「まあ当然の結果だよなーっ。あとその声やめて」

俺は立ち上がり、ハイタッチする二人を尻目にすごすごと風呂場へ向かった。浴室の前で服に手をかける。所謂スーパーパーお色気タイムだ。この作品の見せ場と言っている。

カーディガンを脱ぎ、ワイシャツのボタンをゆっくり外してゆく。上から、ゆっくりと、緩慢に。それがするりと落ち、露わになったタンクトップ。これが肌から離れれば……といったところだが、まだ早い。

ここであえてズボンに行く。ベルトを外しボタンを外しジッパーを下ろす。途端、重力に従いストンと落ちてゆくズボン。その中に見えたのは……そう、すらりとした肌に映える、真っ黒なボクサーパンツだった。

……もういいや。さつさと上と下を脱いで生まれたままの姿になる俺。

しかし、腹の虫が治まらん。仕返しに、今日美香が着てた服を全部裏返しにしてやった。無論下着もだ。ゲームの恨みは怖いのだ。……というか、全裸で何やってんだ俺。

正気を取り直して、浴室への扉を開ける。ってあれ？

「湯船に、お湯がない」

そうか千香、ゲームの恨みって怖いな。

母さん、今日も浴室はつめたいです。

「——と、言うわけでババ抜き大会を決行します!」

こたつの中で片手を高らかに上げ、声高々に宣誓する。二人とも微動だにしないね。

右の美香は勉強、左の千香は相変わらずテレヴィーに嚙り付いてる。ところでテレヴィーってなんですか？

「いきなりなんで？私勉強してるんですが」

「オレも忙しいんですが」

「俺も明日の仕事に備えなきゃいけないんですが」

「備えなよ!」

思わずこちらを見て突っ込む美香。

「だって遊び足りないんだもん」

「うわっ、ガキくせー……」

こら、ものすごい冷めた目で見るのはやめなさい。

「じゃあ、罰ゲームありでどうよ？」

このままじゃ話が流れそうなので、ゲームにひとつ、スパイスを入れてみる。

美香は嫌そうに、えー、と抗議の声を上げていたが、千香が興味を持ったみたいだ。腕を組んで唸ったあと、思いついたように声を上げた。

「じゃあ罰ゲームは兄貴秘蔵のワインー気飲みな」

それじゃ誰が負けても俺悲しくね？

「というか君たち未成年じゃないか」

「兄貴だって飲んでんじゃん」

「俺は成人だ」

「オレ達と同じ年から」

黙りこむ俺。千香は勝ったといわんばかりにニヤリ、と口角を上げた。

「けってーい」

「ちょっとちい、私やだよー気なんて」

いまだ乗り気じゃない美香を、千香がまあまあと宥める。

「勝てばいいんだから。あれーそれともみいはテレビゲーム以外はからっきしかなー」

美香はにっこり微笑んで、パジャマの腕をまくった。どうやらもう、あとには引けないようだな。

カードを切って、時計回りに一枚ずつ配ってゆく。全てを配り終えた所で、各々がカードを手を取った。うげ、ババ俺かよ……。

「あ、お兄ちゃんババでしょ」

「思いつき顔に出てたぜ？」

二人がペアを場に捨てながら、淡々と言った。

「——これだああ！」

ただいまの罰ゲーム回数、俺五回。千香一回。美香なし。

千香の手に持つ二枚から、一枚をズバツと引き抜く。そしてこれが、記念すべき千香の二回目の罰ゲームだ。

俺の手の中でペアになった二枚を場に叩き付けた。崩れ落ちる千香。美香はお構いなしにグラスにワインをどぼどぼ注いで、千香の前に置いてにっこり。ははっほほえましいな！。

千香はグラスなみなみに注がれたワインと暫くにらめっこして、決意したのか手に持ち一気に口に運んだ。いい飲みっぷりだなあ。やがてそれを飲み干した千香は、グラスを振り下ろしこたつ台にダンツと叩き付ける。そして……。

「みんながいじめるよー……」

泣き出した。

千香は泣き上戸だった。

へろへろと仰向けに倒れ、そのままグズグズと泣き出してしまふ。

千香、ここで脱落。

残った美香と視線が合い、微笑みあった。そして、ゲームは再開されるのだった。

「——これだおえええ！」
ただいまの罰ゲーム回数、俺十回、美香なし。そろそろ俺がまずい。

美香から引き抜いたカードは、俺の勝利、そして美香の罰ゲームを宣言した。

「ええつ、うそでしょー！」

まさか勝負事で自分が負けると思わなかったのだらう。読者の熱き想いが届いたのさ！

グラスになみなみ注いで美香の前に置く。につこり。美香もにつこり。穏やかな我が家の日常風景だ。

「うー……南無三つ！」

それが最近の女子高生の掛け声か。

ごくごくと飲み干してゆく美香。飲みっぷりなら千香に負けず劣らずだ。そして飲み干したグラスをゆっくりと台におくと……。

「……ひつく」

ぎろりとこちらを睨みつけた。目が据わってますよ美香さん。

「ねえねえ、何で私未成年なのに飲まされなきゃいけないのぉ？」

「いや……罰ゲームだし、ね？」

「罰ゲームだったら飲ませていいのー？ ねえねえー」

美香は絡み酒だった。顔を必要以上に近づけたかと思えば、がしつと肩を組まれてしまった。美香は開いてるもう一方の手で、グラスにワインを注ぎ始める。

「お兄ちゃんも飲みなさいよおー」

「いや、お兄ちゃんの方が飲んでるしこれは罰ゲームなんだよ？ 美香ちゃんはまだ大人のお姉さんだからわかるよねガボガボ」

美香が無理やり俺の口にグラスのワインを注ぎ込む。

「わかんないわかんないふへへー」

ああ、美香が自ら晩酌してくれるなんて幸せだなー。そう心で呟きながら、俺の意識は深く落ちていった。

「——ちよつとストロー耳に刺さないで！ はっ」

意識が覚醒する。ここは……こたつ。いつもの俺の定位置のようだ。よかつたー夢で。

周りを見渡す。肩から下を、こたつの中にすっぽり納めてる黒髪ショートの妹。こたつ台に突っ伏しながら、立てたワインボトルを大事そうに抱える黒髪ミディアムの妹。二人とも、気持ちよさそうにすやすやと寝息をたてている。

立ち上がろうと動いたけど、二人とも俺の脚の上に乗っかっていて動けない。愛する妹共の寝顔を見て、ため息を一つ。そして俺は動くのをやめ、仰向けに寝転んだ。

母さん、今日もこたつはあつたかいです。

後日、三人仲良く風邪を引いたのはご愛嬌。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7176i/>

こたつ

2010年10月8日15時03分発行